

つなぐ学び・つむぐ学び

由谷 晋一

1. はじめに

筆者は私立中高一貫校に勤務しながら、狂言の役者としても活動している。狂言は六百年以上続く伝統芸能で、台詞は台本に忠実に言い、演技も教わった通りに演じる一方で、狂言が生まれた当初は台本もなく、簡単な筋書きで即興的に演じられていたとも言われている。筆者は後者の側面に注目し、先輩役者の河田全休氏と共に『即興狂言シヨウ』という新たな取組を行ってきた。そこでは、観客から募った3つのキーワードを基にその場で即興的に狂言を創りながら演じる。3つの語は、それぞれ場所、役柄、行動について、互いに特に関連性はないものを出してもらい、例えば12月に大阪で行った公演では「電車、同級生、クリスマス」というお題をもらい、次のように演じ始めた。

ある男がクリスマスプレゼントを買いに行くために電車に乗る。そこへ乗り込んできたのが、今から仕事に行こうという男が見覚えのある顔で、中学校の同級生と判明する。仕事前だが食事でもどうかという話になり、店に入るが余りにも盛り上がりすぎてしまい…
という流れである。

『即興狂言シヨウ』では必ず上演後に公開反省会を行うが、演者たちは別の演じ方があったのではないかと振り返る一方で、多くの観客が、自分たちの出したキーワードを基に狂言が生まれていく瞬間に立ち会い、ドキドキ、ヒヤヒヤして、喜んで下さっていることが分かる。また、古典の演目以上に、ストーリーと自分の経験をつなげながらご覧になり、今回で言えば「何かを買いに行き違うことをしてしまった」ということを思い出す観客も多い。

このような取組と、自分が行ってきた授業の様子を振り返ってみると、以下の二つの点が共通していることに気づく。

①参加者のアイデアに基づいて進めていく点

②予定調和ではなく即興的につむいでいく点

今回は、この二つの観点から、これまで行ってきた取組のいくつかを振り返ってみる。

2. 学びのフォーラム

2021年から高校3年生「コミュニケーション英語Ⅲ」（5単位）で、生徒が自分自身で題材、方法を考えて実践し、その学びを共有する「学びのフォーラム」という単元を始めた。まさに、参加者自身のアイデアに基づいて学びをつむぐ時間である。以下のような流れで10時間を構成した。

- ①これまでの学びを振り返る
- ②これからの学びを提案する
- ③試したい学びのプランを立てる
- ④プランを試して変えながら進めてみる
- ⑤《学びのフォーラム》の開催
振り返り、気づきをシェアする

①これまでの学びを振り返る

これまで授業の内外でどのように英語を学んできたかを振り返り、自分自身はどのような学び方に身が入ったかを考えて、互いにシェアする。

生徒が良いと思う題材や学び方は多岐にわたり、教科書や英語学習教材を使って学ぶのはもちろんだが、TED、YouTubeなどの動画配信、BBC、VOAなどのニュースサイト、洋楽、洋書、オンライン交流、英語版ゲームなどがよく挙げられた。もちろん、授業で紹介した題材や授業で練習している学び方を授業外で継続しているという生徒もいる。しかし、身が入るものとして挙げられたのは、「授業で紹介して出会ってもらったもの」以上に、「自分たちが探索して巡り合い、継続しているもの」が多いことに改めて気づいた。教員としては嬉し悲しいことだが、今回の取組の意味を感じた瞬間だ。

②これからの学びを提案する

①を参考にして、これまでの学びのうちで継続したいこと、これから試してみたいことを考えて、自分自身に提案してみる。クラスメイトや先生に提案ではなく、あくまで未来の自分に提案することで、自分の興味関心や特性と照らして考えてもらう。

③試したい学びのプランを立てる

②をふまえて、これからの2週間で試してみたい具体的な取組を考える。考え始める際のヒントとして、これまでの授業で扱った単元の題材をまとめた4つのキーワード(person, story, research, news)を提示し、ここから考えても良いし、別のキーワードを見つけても良いと伝えてみた。

例えば、ある生徒 U さんが歌手のインタビュー記事を読み、歌の意味をより深く理解したいと言えば、M さんは映画化された小説を題材に使い、シーンごとに小説と映画を比較しながら学んでみたいと言い、Y さんは農学に興味をもっているため農業分野のケーススタディーについて書かれた文章を読んで、農業と気候変動の関係について知りたいと言う。

生徒たちは、このように様々なテーマや題材を挙げてくれるが、たとえ異なるものを挙げている生徒同士だとしても、「そういう学び方もあるなあ、ちょっと真似してみようかな」「そういう学び方もあるなあ、でも自分はこっちが向いているかも」といったことをつぶやきながら考えている。あくまで最後は「自分」で学ぶ単位だが、「自分」の何割かは、クラスメイトや先生といった他者のアイデアで成り立っているということに気づいてほしいと願いながら見守り、応援していた。

④プランを試して変えながら進めてみる

各回の授業で最後に振り返りを行ったり、時折クラスメイトとつぶやきあったり、教員と対話したり、中間シェアを行ったりしながら、プランを柔軟に変更しながら進めていった。

2週間にわたる単元のはじめ、中間、終わりには学びの現在地を自分で確かめる助けとして「学びの現在地シート」を見ながら考えてもらう。学びの方法、内容、表現の三観点をそれぞれ4段階で評価する表を示したが、あくまで現在地を考えるためのもので高評価を得なければならないわけではないと伝

えると、現在の段階を正直に考え、分析してくれる生徒が多かった。

学びの現在地シート(抜粋)

はじめ	4	3
方法	自分でやりたいことを実現するためにふさわしい具体的方法を考え、実際にやってみるなかで方法を吟味して更新することができる。また、方法を選んだ理由やその成果について、十分にイメージできるように説明することができる。	自分でやりたいことを実現するためにふさわしい具体的方法を考え、実際にやってみることができるが、その方法について吟味、更新する余地がある。あるいは、方法を選んだ理由やその成果について説明しようとはするが、やや説明力に欠ける。
内容	英語を学ぶことを通して、知らなかった情報を知ったり、すでに知っていることと比較したり、考えてもみなかったことを考えたりしながら、新たな知識を得るだけでなく新たなモノの見方や考え方を発見することができる。	英語を学ぶことを通して、知らなかった情報を知ったり、すでに知っていることと比較したり、考えてもみなかったことを考えたりしながら、新しい知識を得ることができる。
表現	英語で読んだり聞いたりしたものから、未知の語彙表現や文法について自ら辞書や参考書を活用して理解、習得することができる。表現に活用したいものについては、活用を通して身につけることができる。	英語で読んだり聞いたりしたものから、未知の語彙表現や文法を理解、活用をしようとしているが、自分で調べたり、習熟するための取組についてやや不十分なところがある。

各回の授業の終わりには、「学びの振り返りシート」を用いて「こんなことをしてみた、こうだった!」「次はこんなことしてみたい」といったことを考えてもらった。

学びの振り返りシート(抜粋)

回	目標	こんなことをしてみた・こうだった!こうなった!	次はこんなことをしてみたい
1			
2			
3			

各回の授業でも生徒同士はつぶやき合っているが、単元の真ん中に中間シェアの時間を設けて、あらためて時間をとって、それぞれ学びの方法、内容、表現について気づいたことを伝え合い、「もしちょっと変えるなら、どの人のどのような取組が自分のヒントになるだろうか」と問いかけた。具体的な方法についてヒントを得た例も多かったが、以下のように、他者とシェアしたからこそ自分の学びについてメタ的に捉えることができた生徒の気づきが印象的であった。

- ・それぞれが自分の興味のあることや好きなことについて学んでいるので、自分のやり方も間違っていないということがわかった。
- ・他の人とシェアをしていく中で、もうすでに学びを自分の中に落とし込んで、まとめられている人がいてすごいと思った。

・ゴールを設定するのも必要だと思った。英語の文章を読んで知識を身につけることも大切だけど、その後のことは考えていなかったので学びの中で見つけていきたい。

⑤振り返り、気づきをシェアする

2週間でのどのようなことをしたか、取組をまとめ、グループ内で1人3分程度の報告をしてもらう。また、英語の学びや学びに対する考え方がどのように変わったか、あるいは変わらなかったかをシェアしてもらった。

感想の中には、自分で題材を選ぶことに対する好意的な意見やまた他者の方法や考え方を取り入れてみたという意見が多い。

一方で、自分が選んだ内容について新しいことを知ることができる題材を見つけるのは難しいという声もあった。すなわち、興味のある題材については一定の知識があり、英語で新しく知識を得るに至りにくかったということだ。今回はできなかったが、他の生徒が用意した題材からじっくり学んでみる機会を設けて、「思いも寄らないものから学び、思いを寄せる経験」もしてほしいと考えた。

3. 学びが広がる場を目指す取組

「学びのフォーラム」のような学び方はいきなり導入したわけではなく、教科書や他の教材を用いたこれまでの学びと地続きであった。フォーラム以前に行った、学びが広がっていくような活動をいくつか挙げる。目新しい活動ではないが、それらがもつ意味を考えながら紹介したい。

3-1 ひとつの問いから考えが広がる

授業で英文を読むとき、絶えず inferential question など、答えが一つに定まらない問いについて考えてきた。あらかじめ準備した事実発問はほとんどせず、生徒が考えたい問いについて考えるうえで、必要なことを確認する際に用いたのみである。私たちが英文を読むとき、英語を学ぶためだけに読んでいるわけではない。内容を知り、筆者と共に考えたいから読んでいる。例えば文法事項の習得のみを目指すような「手段の目的化」、あるいは、読む愉しみを学習の手段にしてしまう「目的の手段化」はできる限り避けたいものである。

『大学入試長文シリーズ Front Runner 1』(数研出版) Lesson 1 を例に取ってみると、第一段落を読んだら Where are they eating lettuce? と問いたくなるだろうし、第二段落まで読んだら Why do they grow lettuce in space? と問いたくなるだろう。

“That’s awesome!” “Tastes good!” These are the words of three men as they eat lettuce. Why are they so happy just eating lettuce? The secret is in where they are and in the lettuce they are eating.

Actually, they are astronauts working on the International Space Station (ISS), the huge research laboratory built about 400km above from the earth. The lettuce was not sent to them from the earth, but was grown in space over 33 days, using LED lights. In the video sent from space, we can see smiling astronauts eating “space lettuce” for the first time.

続きを読めば、宇宙で野菜を育てるのは主に食料確保のためであることが示される。ここで改めて Why are they so happy just eating lettuce? や Why do they grow lettuce, not cabbage? という問いについて考えてみたくなる。

3-2 ひとつの題材から問いが広がる

答えが一つに定まらない問いを、常に筆者が用意するのではなく、生徒に考えてもらうことも多かった。それぞれの生徒がクラスの人々と共に考えてみたい問いを共有し、またそれぞれ「答えたい問い」を選び、リアクションを考えてみる。

共有方法はいくつかあり、オンラインツールを使うこともあるが、意外と好評なのがアナログツールだ。例えば、個人で問いを提出してもらい筆者が手書きで集約した「みんなの問い」ハンドアウトを配布した場合もある。また、模造紙に印刷した本文をホワイトボードに示し、グループで選んだ問いを書いた付箋を貼って、「なぜその問いを考えてみたいか」も添えてクラスに問いかけてもらう「問いプレゼン」を行ったこともある。

『Front Runner 1』の文章(部分)を用いたみんなの問いハンドアウト例

① How did they say these words?
 ② Why are they happy eating the lettuce they grew?
 ③ Does it take longer in space?

1 "That's awesome!" "Tastes good!" These are the words of three men as they eat lettuce. Why are they so happy just eating lettuce? The secret is in where they are and in the lettuce they are eating.

2 Actually, they are astronauts working on *the International Space Station (ISS), the huge research laboratory built about 400km above from the earth. The lettuce was not sent to them from the earth, but was grown in space over 33 days, using *LED lights. In the video sent from space, we can see smiling astronauts eating "space lettuce" for the first time.

3-3 ひとつのジャンルから題材が広がる

3-1, 3-2の取組はいずれも、みんなで同じ題材について読み深めるものだが、時折、自分で題材を選ぶ取組も行った。授業で読んだ英文に関連したジャンルから、各自で題材を探してきて読みまわしたり、内容を紹介したりするものだ。

例えば、教科書で科学的研究を扱った英文を読んだら、その内容の構成を利用しながら自分たちが選んだ別の研究について紹介するポスタープレゼンを行う。また、漫画を扱った英文を読んだら、お気に入りの四コマ漫画を選んで、そこから受け取ったメッセージを紹介する。

単元の読後活動としてのみ見ると、生徒が選ぶ題材に、本文で学んだ語彙や表現が現れるとは限らない。本文から離れてしまうことをもったいなく思う部分もあるが、自分で選んだものから学び、互いに紹介する学びの広げ方を生徒も楽しんでくれた。

4. なぜこのような取組を行っているのか

これまでに紹介した取組はすべて、あらかじめ準備された落としどころに収束していくものではなく、むしろ、問い、題材、ジャンルなどのきっかけを出発点に、参加者それぞれが自由に学びを拡散していくものである。『即興授業シヨウ』に参加した生徒たちは、『即興狂言シヨウ』に参加した方々のように、自分たちの出したアイデアを基に授業がつむがれていく、学びが生まれていく瞬間にドキドキ、ヒヤヒヤしながら参加してくれた。

また、教員としては、普段から、生徒が40人いれば、知っていること、知らないこと、知りたいと思うことは40通りであることを認識しながら、いつもみんなで1つのことをすることに難しさを感じ

ることがある。私たちは、目の前の生徒たちにとってどのような題材がいいのか、どのような学び方がいいのか、どのような問いかけがいいのかについて、教科書や副教材、Web ページを開き、同僚と相談しながら悩んでいる。そんな時に、英文を読み返しながらいをを考える難しさと面白さ、教科書や副教材をめくりながら新たに学習する題材を用意する悩ましさと楽しさを、授業の参加者である生徒にも共有していくことによって、お互い息をしやすくなる部分があるのではないだろうか。

ただし、誤解のないように補足させていただきたいのだが、このような取組をもって「教える授業 VS 教えない授業」や「教員が教材や問いを用意する従来型授業 VS 生徒が教材や問いを自分で用意する新しい授業」といった二項対立を作り出したり、いわんや後者の方がより優れていると言いたいのではない。これらは単純に二分できるものではないからである。例えば「教える授業」だと思っても、生徒の発言やリアクションを受けて、偶発的に学んでしまうことはよくある。その延長線上に、今回のような取組があるのだ。そういう意味で、授業の中で何がすでに準備されて決まっている部分なのか、何がその場で即興的に進んでいく部分なのか、授業のなかにあるグラデーションを振り返りながら、次の取組を考えるヒントにしていきたいと感じている。

5. おわりに

本校英語科では、今回に限らず常に同じ学年を担当する先生方と相談しながら、時に他学年担当の先生方にも話を聞いてもらいながら、共に授業をつくらせている。今回の取組について英語科内の授業研究会で発表した際も「これにつながると思うが、高1ではこのようにやっている」「高2では…」「中学では…」と多くの先生方が呼応するように取組をシェアして下さった。また、その後も同じような取組を形を変えて実践し、レポートを共有して下さった。生徒の学びのフォーラムを支えるのは、まずは先生の学びのフォーラムだと思う瞬間である。この場をお借りして、改めて、「自分」の成分になって下さっている先生方に感謝申し上げたい。

(立命館守山中学校・高等学校 教諭)